



サゴヤシの原生地を求めて

山田 勇*

はじめに

サゴヤシは東南アジア島嶼部の東部からニューギニアにかけて自然分布する湿地性のヤシであり、そのデンプンを主食とする地域は現在でも広くみることができる。大陸部の主要農作物が稲という、一年生の茎長高々1m前後のひよわな、しかし数をあわせれば大量の収穫物となるきわめて、現代的な植物であるのに対し、サゴヤシは、まさに東南アジア的ともいうべきか、きわめて巨大で、粗放でかつ、内容物に富んだおもしろみのある植物である。

森林を研究の場とする人間から農業をみると、一方の極に森があり、そこは聖域といおうか、あまり、人間の手で汚されたくない場である。そして、農業は、他方の極として、人間の手によって、完全に改変された世界である。扱う対象も、森は樹高数十mの多様な種群となるが、農業では、高さ数mの単純な草本類がほとんどである。その間には画然たる一線がひかれている。

そういう中で、サゴヤシというのはどういう位置づけにあるのか、これはひよわな草でもなく、また木でもない。丁度、森林と農業の中間地帯に存在するおかしなものである。これまで一時のサゴヤシブームによって、サゴヤシの生態はかなりわかってきた。しかし、その大部分は、栽培された、きわめて農業的なサゴであった。そのイメージは、はたして本当であろうか、私は、1988年10月末から3か月間、いわば、サゴ本来の姿を求めて、パプアニューギニア、マルクへの旅に出た。

セピック川上流域のサゴ

ウエアクからとんだミッション専用のセスナ機は、ニューギニア北部の海岸山脈を横断して、すぐにセピック川の上を飛ぶ。今まで数々の熱帯低地の

大河をみたが、この川はやはりケタ違いに大きい。蛇行した川筋が、常に水路をかえて、三日月湖をつくり、植生をかえていく様子がよくわかる。周辺に全く村のみられない大湿地林もひろがる。どこにも人のいる東南アジアとは一味違う風景である。よくみると、川辺にヤシの群落らしきものがみえる。サゴである。セピック川流域には10万ha規模のサゴヤシがあると推定されている。かなり上空からだすとサゴとココヤシの判別はむづかしいが、高度が下がるとはっきりとサゴとわかる。そしてそのサゴヤシは、川からかなり離れた山裾にまで分布していることがみてとれる。私はここでまず、うれしくなる。というのは、サゴヤシはもともと淡水湿地林の主要構成要素であり、その分布はかなり広いはずなのである。単に村落の周辺に生育するだけでなく、おそらく低湿地のかかなりの部分にも入っている。それが空から確かめられたのである。

アライ村は民博の吉田集而が定着調査をしているセピック上流のサゴ常食村である。私は数日、いそろうとしてここに住みこみ、周辺のサゴを調査した。最初にみたのは、村のすぐ上流の川から少し入った地点である。ここでは、川岸からずっとサゴである。中に入るにつれて広葉樹との混交率が高くなる。蚊はスマトラのマングローブで体験したほどではないが、調査の間中まっていた村民が蚊がかなわんからはやく帰ろうというくらいはいる。林床はかなりぬかるみ、スラウエシのパロポ周辺のように、ここで昼寝をするというわけにはいかない。しかし、ヤシの大きさはそれほどでもない。むろん、手入れはほとんどされていず、村民は数週間に一度、ここへ入ってきて、適期をみて斧で切り、玉切りにして川までころがし、川につないでおく。ここまでが男の仕事である。そして、朝に、女が舟でやってきて、1玉をはずし、村の近くまでもって行って2つに割ってサゴをたたいてとりだし、水でさらして

* Isamu Yamada, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

でんぶんをとる。この仕事をする時、村の女は伝統的な腰まきをして、日がな一日たのしくサゴづくりをやっている。

初日のサゴはそれほどでもなかったが、村民の話では、対岸の山のふもとに大きなサゴがあるという。翌日、我々は、カヌーでは対岸にわたり、サッカーウムの間の小川をどんつきまでいき、そこで舟をすてる。そこはサゴの洗場であるが、そう大きなものはない。我々はまず山へ登る。小さな山であるが、森の状態は、東南アジアのように突出層はなく、クイラ (*Intsia* spp.) がめだつ。どれもこれも所有者がきまっていて、差枯しがしてあり、時期がくれば倒して建築材料にする。出しの悪い所や、大木は手がつけられていない。

頂上から少し下ったところに仮の小屋がある。ここからさらに下ったところに大きなサゴがあるという。一気に下ると、もうそこはベチャベチャの湿地である。林床も歩きにくい。そして、あった。実に見事なサゴである。高さは30mぐらいになるだろう。みあげるような、しかも実に若々しい薄ウグイス色の葉柄から、大きな葉が空にむかって手をひろげている。それが1本や2本ではない、林立しているのである。直径は50cm前後。むろん、人もめったにこないでサッカーが荒々しく繁茂し、地表には落下した果実から一斉に芽がふき出している。

それまで、いささか偏見をもってサゴを考えていた私の気持は、この大きく、美しいサゴをみて完全に変わった。サゴはすばらしい。森林という男の世界に充分通用するものとなったのである。

村民もこのすばらしいサゴを村の近くで育てようと子供をとって帰った。次の日にみた別の村の近くには、確かにこの同じサゴがうえられ、同じように大きく生長していた。

ニューギニアでみたサゴを中心に考えると、サゴはやはり、淡水湿地林の中層を形成する主要な要素であり、そのもっとも大きなものは、湿地がおわり、丘陵地帯に入る手前あたりにみられるということになる。これは他の地域でも真実なのだろうか。

バチャン島のサゴ

ニューギニアのサゴに気をよくした私は、それからオーストラリアのマングループ、北部の森林およ

び低湿地林を少しみて、その単純さ、小ささに失望し、逆にますます、東南アジアの大きさ、底の深さに期待しつつ、ジャカルタ入りし、1カ月の後、再び、サゴを求めてマルクへとんだ。スラウェンのパロポ周辺、とアンボンのサゴをみて、テルナテからバチャン島へ入ったのは、1988年の暮れもおしせまった頃であった。

バチャン島はハルマヘラの西北部にある、あたりではなかなか大きな島である。ハルマヘラまでいく人は多いが、ここまで足をのばす人は少ない。ポゴールでえた情報でも、あまり開発の手はのびていず、しかもサゴの中心的な島ということであった。数年前にオランダ人が一人植物採集にいつているが、その時はテルナテから一昼夜かけて船でわたった。2,000 mに達する高い山が原生林におおわれている。その山に登ったが、頂上まではいけず、途中でひき返した。村の人々はみな大へん協力的であった。低い部分には伐採業者が入っているが、うまくいけば、車で途中まで送ってくれる、等々の情報かみても、いかにも楽しそうな島である。近頃は週3回、飛行機がとんでいるという。

テルナテからインドアフィアの小さな飛行機は、8月に爆発したばかりの火山島の横をとび、眼下に夢のように美しいとしか形容できない、青い珊瑚礁の海と白い砂浜にかこまれたマルクの島々を見下ろし、1時間でバチャン島のラブハへ着く。上空からながめたバチャン島は、一応林道は入っているが、それほどあらされていない多雨林が重層構造を成している。ラブハの町の郊外に日本軍がつくった小さな飛行場がある。飛行機は無事着陸し、我々は、島に2軒あるホテルのうち、ポンドックインダという1泊3食付1万ルピアという、うれしくなるような宿屋に滞在することになった。

営林署、チャマツト、警察などの挨拶をすまし、古老の話をきいて、それから数日かけて毎日、サゴをみてまわった。どれもこれも、それなりによかったが、もうひとつというところで、1988年は終わった。元旦はむろん、バチャンでも休日である。しかし、大みそかに、宿へやってきた男の話は我々を元旦にまでフィールドへ出す決心をさせた。バチャン島における、もっとも大きなサゴ林がすぐ近くにあるというのである。もともとバチャン島の人々にい

わせると、ここはマルクを中心であり、他の島にあるサゴはすべてここから移植したものであるという。その真偽はともかく、地形的にみてもサゴに適するところが多いのは確かである。そして元旦にいうこのというのはラブハの町の北を流れる川をさかのぼった地域である。

元旦の朝、天気は上々、我々はカヌーで町を離れた。手漕ぎの小さなカヌーに5人。3人の漕ぎ手により、カヌーは実にかろやかに川を上っていく。マングローブがニッパ一色になり、やがてサゴヤシがまじってきて、やがてサゴだけになる。かなり高きところに仮小屋掛けしたあとがみえるが、かなり古い。近頃は、ここまでとりにくる人はなくなったという。さらに我々は上流へ上る。川巾は2mほどになる。兩岸からサゴの葉が倒れトゲだらけの枯れた部分が体にさわるのをさけつつ、進むが、やがて、カヌーでは進めなくなり、おりて歩き出す。乗物からおりて、歩き出す時、しかもそれが湿地の時は実に最初の一步がイヤである。しかし、ふしぎなことに、しばらく泥だらけになって歩くと、それもまた楽しという気になる。30分ばかり歩いて、我々はこのあたりが一番大きいという所へくる。

ここは淡水湿地林のまん中である。中央を巾1.5mくらいの川が流れ、そのまわりにサゴが28mくらいの高さまでみられる。そしてその上層に *Campnosperma* のよくはった樹冠がみられる。つまり、サゴは第一層の広葉樹の樹冠のすぐ下を厚くおおう第二層となっているのである。サゴの個体数は川の周辺がもっとも多く、川から離れるにしたがって徐々に減少し、100mも離れると広葉樹のみの湿地林となる。この上流にいけば、さらに大きなサゴもみられるという。おそらく、セピックでみた山裾直下の最大のサゴと同じようなことがここでもみられるのであろう。そして、これが本来のサゴの姿なのだ。

元旦に無理して、泥あそびをしてよかったと私は思った。サゴ本来の姿を、やっと納得づくでみる事ができた。これで今度の旅の目的は達せられた。

サンギェのサゴバル

スラウェシの北端、メナドからさらに北へ1時間ばかり飛ぶとサンギェという島につく。ここは湿地性ではない、乾土に生育するサゴがあるという。同

行したボゴールのアニスハヤシの専門家で、この島へ渡ることが念願であった。着陸の寸前の飛行機の窓からみたものは、一面のココヤシとその下に生える何やら別のサゴであった。

このサゴは、低湿地に生えるいわゆるサゴ (*Metroxylon*) と共に、山に生えるサゴバル (*Arenga microcarpa*) とがある。このサゴバルは、島を走るとおどろくべきことに、道からみえるところすべてをおおっているといってもいいすぎではない。低湿地のものにくらべて高さは8m、直径は20cmくらいで、小さなものだが、それでも数をよせれば相当なものである。サゴの抽出はキカイ化されているが、基本的に低湿地と同じである。

このヤシはもともとここにあったものではない。本来の自然分布はマルクからパプアニューギニアにかけての山地に生育する。それがいつ頃からサンギェに入ったか、確かな証拠はないが、この島は古くからアンボンと関係が深く、交易を通じてもたらされたらうと島民はいう。それにしても、この島だけにこれだけ多くみられるというのはおもしろい。インドネシアの島をひとつひとつ調査すれば、さらにこの分布はひろがるかもしれない。

旅のおわりに

サゴは、東南アジア島嶼部の東部を起源地に、広く西方にまで分布する、無視できないというよりも、もっとも重要な森林産物である。サゴの島をみてきて、そのどこにも「稲」がないのに気がついた。考えてみると、我々日本人は、「稲」というものに中心をおきすぎて、今まで、それ以外のものがないがしろにしすぎてきたのではないだろうか。東南アジアの「稲」については、日本の研究陣は圧倒的な強みをみせ、着実に成果をあげ、その東南アジア研究に寄与するところはきわめて大きいことは周知の通りである。その確立したルートはますます太くなっていったらう。しかし、一方で、サゴにかぎらず、イモにしる、林産物にしる、そして最後に森林については、何と不明なことが多いことか。しかもこれらの分野の、東南アジア研究での位置づけは重要である。サゴの背後に広大な未知の分野をみた旅であった。

(京都大学東南アジア研究センター助教授)